

## 【研究動向】

## ユーリー・ベリョースキンの世界神話研究

直野 洋子

## 一 数万年前にさかのぼる神話の歴史

近年のDNA分析などの進歩によって、全現世人類の起源が二十万年以上前のアフリカにさかのぼることが明らかになってきたのは周知の事実だが、それに応じて神話研究も数万年のスパンで考えられる可能性が出てきた。考古学、放射性炭素などによる年代測定法、集団遺伝学などの成果をふまえ、世界規模での神話の比較研究をめざす「世界神話学 World Mythology」の代表的な学者の一人が、ロシア・サンクトペテルブルグの人類学・民族学博物館（クンストカメラ）アメリカ部門主任、サンクトペテルブルグ・ヨーロッパ大学民族学部教授のユーリー・ベリョースキン（ベレツィン<sup>①</sup>）である。

その研究の概要は、すでに松村一男によって紹介されており（松村 二〇〇九、二〇一〇）、去年五月國學院大学で開催された第三回国際比較神話学会議でベリョースキン自身が講演を

行っている（ベレツィン 二〇〇九）。ここでは、ロシアで昨年出版された彼の新著『旧世界から新世界へ…世界諸民族の神話』(Березкин 2009)の内容を中心に紹介したい。

本書は二部構成で、第一部ではこれまでの神話研究史が批判的に紹介されている。全体の四分の三以上を占める第二部では、具体的な神話の事例、モチーフが紹介され、人類がアフリカからユーラシア大陸全域、オーストラリア、アメリカ新大陸へと移住していった足跡と照らし合わせながら、神話モチーフの起源と広がりを見論している。

序文で彼は自らの研究の立脚点を次のように述べている（括弧内は筆者の補足。以下同様）。

「本書の主たる課題は（珍しい神話の紹介とは）別にあり、そもそも神話学に直接関係するものではない。著者の関心は歴史、より正確には先史時代の領域にあり、つまり歴史的過程の中の文献には表れない部分に集中している。その部分というのは、書かれた歴史に対して、氷山の水上部分に対する水面下の部分のようなものだ。一九九〇年代に私は徐々に次のような確信に近づいた。すなわち、地球上の様々な地域における神話の分布は、何千年ではなく何万年もの昔に起こった人々の移住や文化間のつながりを再構築することに役立つということである」（五、六頁）。

「法則を知らずして、歴史を理解することはできない。しかし、伝統、つまり単純な複製行為を無視した場合にも、やはり歴

史を理解することはできない。つまり具体的に言えば、移住や文化間の接触は、立派な専門家が研究するにはあたかもふさわしくないような（中略）二次的、非本質的な現象などではないということである。一斉の、あるいは散発的な移住、ある文化から他の文化への影響というものは、歴史の全体ではないにしても、その大変重要な部分なのである」（七頁）。

つまり、ペリヨースキンの手法は、神話の類似性を、まず移住や伝播によって説明しようとし、その際必ず、集団遺伝学や考古学などで明らかにしてきた人類史を参照するものであり、きわめて実証的・学際的であると言える。神話の類似・変化によって、逆に世界中に散らばった人類グループの間の関係が浮かび上がるという側面もあり、人類学・歴史学に対する貢献も期待される。

## 二 神話研究史をふり返って

第一部では、フレーザー流の進化主義、太陽神話学派、フロイト主義、マルクス主義、レヴィ・ストロースの構造主義までをまとめて、演繹と一元論に基づいた前世紀的な思考様式であると切り捨てている。

ソ連、ロシアの研究史に関する指摘も興味深いが、中でも、V・N・トポロフの「宇宙樹」理論に対する批判は痛烈である。主に次の点が指摘されている。

(一) 一九九〇年代初頭に（社会主義時代に読めなかった）ユングの著作が翻訳紹介され、ユングの理論が大衆化するにつれ数多くの「原型」が生み出されたが、その中でも「宇宙樹」は特別の地位を占める。ロシアの人文科学者の中には、いまだにそれを信じている者が少なくない。

(二) 「宇宙樹」の概念は直接ユングから取り入れられたものではなく、一九世紀から二〇世紀前半にかけて徐々に形成され、ロシアでは一九七〇年代に確立された。アメリカで原型の理論と心理主義が結びついたのは理屈に合うが、ロシアでは矛盾したことに、それが進化主義と混ざり合った。

(三) 宇宙樹の形象が「具体的な神話体系に対してそれを組織化する特別な役割を果たし、その内的構造や基本的な変数全てを規定する」、つまり文化的帰属の如何によらず無意識に埋め込まれたものだといふのであれば、近東やヨーロッパで青銅器時代以降しかこの形象が「再建」されず、一方でそれと全く異なる文化を持つオーストラリアでも見られるのはなぜか。

(四) 宇宙樹のアナロジーが、はしご、鎖、人間まで含むのは、広げすぎではないか。ソ連時代に「階級闘争」や「母権制」をあらゆるものに見いだしたように、まず「宇宙樹」があることを前提に、それを具体的な神話テキストの中に見つけ出そうとしている。

(五) 宇宙樹をもっと狭く「宇宙の複数の階層をつなぐ、硬い垂直軸」と定義するなら、それは主として北ユーラシアとアメ

リカ各地にのみ見られモチーフである。

一方で、一九世紀的進化主義と対立した、ポアス率いるアメリカ歴史人類学の実証的研究姿勢と資料収集の成果を高く評価している。

「(多地域独立発生説を唱えるドイツの民族学者アドルフ・バステイアンと論争する中で) ポアスは同様な文化特徴の出現を、極力、移住に伴って運ばれたものとは説明しないようにしていた。そもそも彼は、複雑すぎて同時代の科学では説明できないような問題の解決を急がなかった。要は、科学は現実的な課題を設定し、将来の研究のために資料を収集するべきだということなのである」(五二頁)。

それに対し、類話のめん密な比較研究を通して、そのプロットの起源や伝播の経路を探ろうとする歴史地理的方法(フィンランド学派)は、労多くして成果は少なかったと指摘している。「話型索引」や『モチーフ索引』を作ったステイス・トムソンによる、北米インディアンの「星婿の神話」の研究を取り上げ、「最初のプロットが形成されたのはおそらくグレートプレーンズで、一三世紀以前だった」というその結論は、神話を知っている者にとっては馬鹿げたものだと一蹴している。その理由は、トムソンが分析した個々のエピソードが、何百もの他の北米神話にもあるのに、研究対象外になっていること、様々なエピソードがどこからどこへ借用され、最初にどのような組み合わせられたか特定することは、混ぜ合わされた何十もの絵の具の元

の色を区別するようなものであり、そもそも個々の神話プロットのたどった遠い過去の具体的な運命を再建することなど不可能だというものである。また、さらに重要なのは、「星婿の神話」が南米にもインドネシアにもフィリピンにもあり、その年代が何千年、何万年も前にさかのぼるはずだということである。

同じフィンランド学派でも、ギリシャ神話「鶴とピュグマイオイの戦い」の類話を世界中から集めたY・トイヴォネンの一九三七年の研究を、ベリョースキンは高く評価している。「地球のゆうに半分で(各話例の)関連性が跡づけられる一方、物語の特殊性と複雑さから、それらが独立に何度も発生した可能性は疑わしい。にもかかわらず、トイヴォネン自身も彼の仲間も、得られた分布図に基づき明確な歴史的結論を何も下さなかった。それについては、彼らを賞賛する他ない」と述べ、次のように宣言する。

「神話研究は過去の姿に命を吹き込み、豊かにするが、その姿自体を描き出すのは他の学問分野の専門家たち、考古学者、自然人類学者、言語学者、遺伝学者である。二〇世紀の前半、(分子)遺伝学はいまだ誕生せず、他の学問分野の資料は、文化発展の十分詳細な見取り図を作るにはあまりに断片的であった。二一世紀初頭の現在、状況は根底から変わり、人類の過去がその大筋で明らかになったと断言できる。それだからこそ、歴史の原典としてフォークロアや神話に再び向き合う時がやって来たのである」(七九頁)。

第一部の最後に、明らかにになったその人類の足跡がたどられる。

〈出アフリカ〉

二十〜十萬年前 アフリカで現世人類が徐々に形成される。

六萬年前 バベルマンデブ海峡（紅海の南端）を通って、アラビアへ渡り、海沿いにペルシャ湾、イランに到達して分岐。一部は北上して、西ユーラシアに向かい、他は海沿いに東に向かい、その後、東南アジアの内陸部に入る。

〈東南・東アジア〉

三萬年前 中国、日本に存在の証拠。

二萬年前 一部は東アジアから西へ向かい、北ヨーロッパのバルト海に到達した可能性。

一萬年前 中国で農耕が起こり、人口が増加、オーストロアジア語<sup>(2)</sup>、オーストロネシア語<sup>(3)</sup>などを話すグループが、東南アジアとオセアニアへ広がる。

〈アメリカ〉

一萬二〜四千年前、または一萬五〜六千年前 様々なグループの人類が陸続きだったベーリング海峡を渡ってアメリカに移住。

五千年前 エスキモーの祖先がシベリアからアメリカ北極地域に移住。

〈オーストラリア〉

四万〜四萬五千年前 陸続きだったオーストラリア、ニュー

ジーランド等に到達。

一万〜一万二千年前 新たな移住。

### 三 二つの異質の神話系統

第二部では神話モチーフのテーマごとに、その分布と内容の異同が詳細に分析されている。それらは人類の移動経路によって、インド・太平洋系と北ユーラシア系の二つのグループに大きく分けられるという。次のようなモチーフ・プロットが特徴的なものである。

〈インド・太平洋系アジア、メラネシア、南米〉

・性的接触によって様々な存在・物体が誕生する

・解剖学・生理学的な病態、変異

・異常、危険な婚姻関係

・男女間の敵対

・花婿を捜して旅する娘（姉妹）

・月に木や灌木がある

・動物や鳥たちが互いに色を塗り、一方（一匹）が失敗する

〈北ユーラシア系ヨーロッパ、カフカス、南シベリア、（北東アジア、北米の北西部を飛ばして）北米の主にロッキー山脈東側〉

若い男性を主人公とする英雄的なプロット―「巨鳥のひな鳥の命を救う」、「家畜の主の洞穴からの逃走」、「似た者たちの中

から妻（夫、息子他）を見分ける難題」、「醜い（動物の）夫を受け入れ、夫が後に変身する」、「様々な能力を持つ仲間（兄弟）等のモチーフが使われている

・大地を作るために潜水して土を持って来る

・天空の狩り（星座神話）

・大熊座の七星をそれぞれ人物に見立てる（星座神話）

・月に水桶を持った娘がいる

全ての話がこのようにきれいに二分割できるわけではないが、約三万五千のテキストに含まれる約一五〇〇モチーフを統計処理することによって、この二つの広汎なフォークロア・神話区域の存在が明らかになったということである。北米、ポリネシア、西シベリア、極東では、この二系統の話・モチーフが混在しており、「この地域の現在の居住者の複雑な来歴を反映している」（二八一頁）。

それでは人類の故郷、アフリカの神話はどのようなものだったのか。本書と同時期に発表された論文「アフリカの神話―モチーフの地域分布」（Bepeskin 2009）に簡潔にまとめられているので、そちらから引用したい。

「おそらく、我々の祖先が6万年前アフリカを出る頃までには、神話を語れるぐらい十分に言語が発達していたのである。多くの物語が死の起源を説明していることは驚くにあたらない」として、死の起源に関するモチーフの全種類がアフリカで見られることを指摘している。他に天体（主に太陽・月・ス

バル）、天地の分離、地下界からの人類出現、社会組織の発生（文化面での男性支配）を、人類初期のモチーフとして挙げている。このようなモチーフのセットは、インド・太平洋地域に最もよく残っているが、「これはまさに、アフリカの移住者たちの奔流が最初に向かい、その子孫が比較的無事に最後の氷河期のピークを生き延びた地域である。別の移住者たちは、ペルシャ湾地方から北方の氷河期前のユーラシア地域に広がっていった。ここで氷河期のピークを生き延びた者たちは、アフリカの遺産を失い、新しい神話を発展させたのだ。」（四五頁）

『旧大陸から新大陸へ』に戻って紹介を続けるが、アフリカにはほとんど見られないので、アフリカ出發後に発展したと思われるのが、上記の北米ユーラシア系の發達した星座神話と、インド・太平洋系の性的、解剖学的な神話である。

#### 四 イザナギ・イザナミの国産み神話を例に

その後者の例として、日本の神話が引用されているので、他の地域とどのように比較対照されているか、少し詳しく紹介したい。

まずイザナギ・イザナミの国産みのくだりが、北米の話と比較される。

（古事記より）二神が天浮橋（あめのうきはし）に立ち、海中をかきまわすと、その矛先から滴った塩が固まってオノゴ

口島ができた。この島に降り立つと、イザナギは妹のイザナミに「あなたの体はどのようにできていますか」と尋ねた。「私の体は成長しましたが、成長しきっていないところがあるところがあります」と答えたので、イザナミは「私の体は成長して、成長し過ぎたところが一つあります。そこで、この私の成長し過ぎたところで、あなたの成長していないところをふさいで、国を生みたいと思います。生むのはどうでしょう。」「いいでしょう」。そこで二神は柱を互いに逆に回り、出会った時、まず女神の方が「ほんとうにすてきな男ね」と唱え、男神が「ほんとうにすてきな女だ」と応じたが、その結果生まれたのは蛭子（ひるこ）（と淡島）だったので、もう一度儀式を繰り返した。今度は男神の方が先に声をかけた。その結果、イザナミは日本列島の島の神々、自然神、家宅の神などを産み、火神を産んだ時の火傷で死んでしまうので、イザナギは一人で新しい神を産み続ける。イザナミは黄泉の国の主となった。

〔南カリフォルニアのルイセイニョ族〕 暗闇の中で兄（天空）が「あなたは誰か、これはあなたの体のどこか」と尋ね、妹（大地）が答えていき、結ばれる。妹はお腹が重くなりすぎて倒れ、兄がお腹を切ると、子ども（ランダムなもの）が次々と出て来る。

このプロットの特徴は、神的なペアが人や国ばかりでなく、自然や文化に関連する様々なものを産み出すこと、このペアが会話しながらお互いを徐々に知っていくことの二つが結びつい

ているところにあり、カリフォルニアの神話も日本の神話と同じ東アジアのプロトタイプにさかのぼり、それはアメリカ移住の時期にあたるかもしれない、とベリョースキンは推測している。

一方で、最初の結婚でおかしな子どもを産んでしまい、結婚の儀式を正しくやり直し、立派な子に神を産むというモチーフは、北米にはないが、オーストロネシア語族と共通のものだという。こうした南方の影響が日本に及んだのは、早くて五〇〇年前に（農耕による人口増加に伴い）オーストロネシア人の拡散が始まった後であろう、なぜなら「日本書紀」にあるオオゲツヒメの神話（死体から穀物などが生まれる）も、形式的な結婚儀礼も農耕民族に固有のものだからだと指摘している。オーストロネシア語族の話例を以下に一つ引用する。

〔台湾のアミ族〕 洪水の時、兄と妹は木の臼に乗って助かる。結婚して蛇や蛙を産む。太陽が神々を遣わして宗教儀式を教え、その後二人は普通の人間、アミの祖先を産んだ。

## 五 世界システムの神話

最後の章では「世界システム」の時代の神話を論じている。世界システムとは、複雑な社会を相互につながネットワークのことで、紀元前一千年の半ば頃には地中海からインド、中国までのユーラシア大陸がそのシステムに組み込まれていたとい

う。<sup>(5)</sup> 農耕と牧畜が発展、商品や技術の流通が盛んになるにつれ、各文明の中心地の人口が増え、文明間の人口希薄な地域も交易路が通っていたのでやはりこのシステムに入った。遠隔の地がつながり、ユーラシア中心地の経済的一体性が強まると、文化的・自然的特性からなるべく自由で、異なった文化的環境でも覚えやすく再現しやすいフォークロア形式が優勢になったはずと指摘する。ローマ帝国と漢が没落し、大ステップを遊牧民が怒濤のように駆け回った起源後三―五世紀の危機の時代、むしろそうした傾向は強まった。

「おそらくまさにこの時代（西洋の古代後期と中世初期、中国の漢から唐の時代）に、魔法昔話が誕生し、燎原の火のように広がり始めたのだ」（二六九頁）。上記のように、ユーラシアの魔法昔話のいくつかのモチーフは、北米神話との共通性から、アジアから新大陸への移住が絶える数千年前までに誕生したと思われる、旧約聖書、古代ギリシャ文学には昔話特有のモチーフ連続が見られるが、「しかし魔法昔話は、単に、いくつかの標準的なプロット構成モチーフと文体的常套句が組合わさったものではない。新しい「スーパープロット」なのである。主人公の旅立ちに始まり、結婚に終わる物語。民族学者より心理学者が研究すべき理由により、このプロットこそが暗記と再現のために理想的だったのである。そしてこのような理想的な形式が誕生したとたん、それは競争相手を押しのけ、吸収しながら、何度も何度も複製されることになっ

た。この類いのもので、これ以上完全なものは未だかつて作られたことがない」（三七〇頁）。

この「世界システム」の時代には、昔話だけではなく、神話の形象やプロットも本来の伝統を離れて動き始め、また、世界宗教も広まった。両者が平行して拡散した結果、生まれたのが「民衆キリスト教」「民衆イスラム教」「民衆仏教」であるという。こうした、ユーラシアに広く分布し、民間信仰にも現れる物語として、次のようなものが挙げられている。当然、オーストラリアやアメリカ、サハラ以南にはあまり見られないのが特徴である。

- ・ 神様の留守に創造途中の人間が（つばをはきかけられ）死すべきものとなる。裏切った番犬は罰せられる。
- ・ 創造の失敗、墮罪により爪状の硬い皮が、爪にだけ残った。
- ・（天から）落とされたり隠されたりした者が、様々な場所（森、家など）の霊になる。
- ・ 原初カププルが何度か子どもを産むが、一部が精霊や虫になり、一部が人間になった。
- ・ 創世の時、大地が空より大きかったので、縮めると山ができた。

・ 大地を魚、人、牛が支えている。

最後のモチーフは、イスラム起源が通説だったが、世界中の採集資料や文献を綿密に比較対照することにより、東アジアの「魚が支える」形が最古で、それが徐々に変化しながら、紀元

前までに西ユーラシアの民間信仰の世界観（魚の上に牛が立ち大地を支える）を形作ったのではないかと推論している。有力な根拠となったのは、一九七二年に中国湖南省で発掘された馬王堆の副葬品である。紀元前一六八年に亡くなったタイ侯夫人の棺にかけられた絹布には、当時の世界観が描かれ、その一番下部では、裸の人間が二匹のナマズらしき魚の上に立ち、上層階を手で支えている。

ペリヨースキンは昨年、國學院大学で開かれた第三回国際比較神話学会議での講演梗概でも、上記の「イザナギ・イザナミの国産み」の話の中の、「原初カプトルが何度か子どもを産むが、一部が精霊や虫になる」というモチーフを、ユーラシア横断的なものと指摘している。その最後に「神話モチーフが紀元前の諸世紀におけるユーラシア横断的な経済的、文化的リンクの形成の始まりからすでにユーラシア大陸を横断して伝播されていたという事実そのものは、不思議とは思えない。しかし、コスモロジーに関わるあるクラスもモチーフの全体の伝播が、東から西という一方のみであったというならば、それは注目に値するし、その理由を説明するのは容易ではないだろう。」（ペリヨースキン 二〇〇九）と述べている。

日本人のDNAからは、この列島に様々な起源を持つ多くのグループがやってきて融合したことがわかってきた。ペリヨースキンの研究によって、日本の昔話、伝説、神話の多様性にも、何万年にもわたるそうした歴史的背景があることにあらためて

気づかされる。これまで主に「西から東へ」の影響が論じられてきたことを考えれば、「東から西へ」の大きな潮流の指摘は興味深いし、「世界システム」を背景にして、「西から東（日本へ）」どのような影響があったか見直してみることがおもしろいのではないだろうか。それとは別に、「スーパードット」としての魔法昔話が、日本の民話にも影響を与えたのかどうか、興味を引かれるところである。

もつとも、同じ世界神話学研究の第一人者で、ハーバード大学サンスクリット学・インド学教授のマイケル・ヴィツェルの見解は少し違うようだ。彼は上記の國學院大学での会議の基調講演において、紀元前二千年頃の中央アジアを通じた日本とインド・イラン語族の影響関係を、『古事記』『日本書紀』『アヴェスタ』（古代イラン）『リグ・ヴェーダ』等（ヴェーダ期インド）を使って論じている（ヴィツェル 二〇〇九）。「インド・イラン人の原郷である中央アジアのステップベルトは、朝鮮半島北部／満州からルーマニア／ハンガリーにわたる全域での素早い遊牧民の軍事的・文化的交流によって特徴づけられる」（三三頁）が、この中央部が絶え間ない人々の移動と再編成によりめまぐるしく状況が変わったのに対し、その周辺部である日本神話やヴェーダ期インド神話には共通の古形が多く保存されたというのである。

## 六 インターネット上の膨大なモチーフカタログ

このように、「世界システムの神話」という考え方は、まだ仮説的で議論のあるものかもしれない。しかし、膨大なフォークロア資料のストックを駆使するペリヨースキンの手法は、人類の移住に伴う神話モチーフの発生・拡散ばかりでなく、人類が世界中に割拠した後のモチーフ伝播を考える上でも大きな力を発揮するに違いない。そしてこのストックは幸いなことに、イ



〈図1〉モチーフ「世界の母」の分布

<http://starling.rinet.ru/kozmin/tales/index.php?type=b5b&index=berezkin>



〈図2〉「原初の男女が言葉を交わす」「世界の母」の2モチーフが共存する場所

<http://starling.rinet.ru/kozmin/tales/index.php?type=b5b%2Bb5a&index=berezkin>

ンターネット上で公開されている。「フォークロア・神話モチーフのテーマ分類と地域分布」というデータベースで、二〇一一年一月現在、約一四〇〇モチーフ、四万五千以上のテキストを含み、毎年三〜五千テキストずつ増えているという。モチーフの分布を世界地図に表示できる頁 (<http://starling.rinet.ru/kozmin/tales/index.php?type=b5b%2Bb5a&index=berezkin>) は英語表記になっているが、ペリヨースキンによる序文や話例の粗筋がロシア語でしか読めないのは残念である。

ちなみに上述のイザナギ・イザナミが言葉をかわすモチーフは“BSA Primeval man and woman engage into dialogue”に分類され、12カ所で、人間ばかりでなく様々な生き物、物体を産み出すモチーフは、“BSB World mother”に分類され、20カ所に存在する。後者の分布は図1、また、両者のモチーフが共に見られる地域は、北シベリアのヌガナサン、日本、北米の西南部三カ所の計五カ所で、図2のように表示される。

このカタログを作成したA・V・コジミンは、トムソンのモチーフ・インデックスとの違いを、次のように述べている (Kozьмин 2006, 2008)。トムソンのモチーフがテキスト分析を目的としているのに対し、こちらはそれぞれの伝統間の関連を明らかにすることを目的としており、ベリョースキン是一種「無定見に」、モチーフを「様々なテキストに見いだされる任意のエピソードや形象、あるいはエピソードや形象の組み合わせ」と定義している。この目的のため、トムソンのカタログの大部分を占めている、特徴のない、明らかにどこにもあるようなモチーフは割愛されている。また、特定の社会的経済的コンテキストにしか現れないような偶発的な要素 (ノイズ) も統計的数学的処理によって省かれていくのである。

進化し続ける、この貴重なデータベースの全体が英訳されれば、さらに利便性が高まるであろう。先人たちの地道な資料収集、インターネットによりその膨大な情報の利用効率が飛躍的に向上したこと、さらに分子遺伝学、年代測定などの先端的科学技術の成果などがいまっつて、「世界神話学」という神話研究の新たな展望が開けてきたのだと思われる。上記のように、世界システム論の影響も見られる。これは松村が示唆するように、一種のパラダイムシフトかもしれない (松村 二〇一〇、一七頁)。具体的な神話モチーフの起源や影響関係についてのべ

リョースキンの見解にも、画期的なもの、議論を呼ぶものが多く含まれると思われるので、一日も早いその全貌の紹介が待たれるところである。

#### 〈注釈〉

- (1) ロシア語では「ベリョースキン」と読むが、国際学会における英語の紹介では「ベレットイン」だったので、これまでそのように表記されてきた。
- (2) オーストロアジア語族は、かつてインドシナ半島からインド東北部、マレー半島にかけて広大な地域を占めていたと考えられる。現在はその間に、チベット・ビルマ語系、タイ語系、オーストロネシア語族の言語が割り込み、取り囲んでいるので、島状の分布状態を示す。言語数は約一五〇。
- (3) オーストロネシア語族は、西はアフリカのマダガスカル島、東はイースター島、北は台湾、ハワイ、南はニュージーランドに囲まれた東南アジア、オセアニアで話されている約一〇〇〇の現地語の総称。
- (4) この統計処理は、ベリョースキンの『神話がアメリカに移り住むーフォークロア・モチーフの地域分布と新大陸への早期の移住』(筆者未見) についてのコジミンの書評 (Kozьмин 2007) で説明されているものと同じ、主成分分析 (観測値が複数の値からなるデータを統計的に扱う「多変量解析」の手法の一つ) と思われる。コジミ

ンによれば、分析の主眼は、各伝統の地域的特性をもっともよく明らかにするモチーフ群を選択することにある。たとえば第一モチーフ群(第一主成分)は新大陸を二つの大きな領域に分割する。つまり、カナダとアメリカ合衆国か、アマゾンか、どちらかを間違いなく指向するモチーフが最大限重要視される。

(5) 世界システムとは、複数の文化ないし国家を広く包括する大規模な政治的・経済的構成体のことで、アメリカの社会学者・歴史学者ウォーラステインが提唱した概念。これまで歴史に登場した世界システムには、政治的に統合された世界帝国と、商品連鎖によって経済的に統合されているが、政治的には統合されていない世界経済があるという。

#### 〈参考資料〉

- Березкин Ю.Е. Мифы далекого прошлого. Живая старина, 2005.4. М., С.2-4.
- Березкин Ю.Е. Мифология Африки:Ареальное распределение мотивов. Живая старина, 2009.2. М., С.43-45.
- Березкин Ю.Е. Из Старого в Новый Свет. Мифы народов мира. М., 2009.
- Березкин Ю.Е. Тематическая классификация и распределение фольклорно-мифологических мотивов по ареалам.

<http://www.ruthenia.ru/folklore/berezkin/?nocalendar>—

Белетцин, Юрий 『古事記』におけるオーストロネシア語族神話との対応例と「民間キリスト教」のインド・パシフィックの起源」第三回国際比較神話学会議発表要旨 國學院大學 二〇〇九

<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/IACM/SpeakersandAbstracts.html>

Козьмин А.В. и др. К юбилею Ю.Б.Березкина. Живая старина, 2006.4. М., С.50.

Козьмин А.В. Мифы и история(Рецензия на кн.:Ю.Е.Березкин. Мифы заселяют Америку: Ареальное распределение фольклорных мотивов и ранние миграции в Новый Свет. М., 2007). Живая старина, 2008, М., С.59-60.

Вейтцел, Майкел (Witzel, Michael) 「中央アジア神話と日本神話」松村一男訳、第三回国際比較神話学会議基調講演発表原稿 國學院大學 二〇〇九

21coe.kokugakuin.ac.jp/articles/inttranslation/pdf/Witzel\_ver100.pdf

松村一男 「世界神話における日月神話—ユーリ・ベルетцинの研究を中心に」 『天空の世界神話』二〇〇九 八坂書房

松村一男 「比較神話学の現状と展望—世界神話学」 『神話思考』(1)「自然と人間」二〇一〇 言叢社

(なおの・ゆうじ) / ロシア口承文芸学)